実 践 報 告

質の高い音楽経験へ向かう音楽科の学力を育む授業づくりの探究
－音楽的知覚・反応を高める手立ての工夫－

今村　志保*

Study of Class Producing of a Lesson which the Academic Ability of the Music Department which Goes to a High Quality Music Experience: Ingenuity of the Approach to Raise Musical Perception, Reaction

Shiho IMAMURA*

【要約】
音楽を分析的に考えていくことが，音楽の構造的な美しさを味わうことに向かわせ，音楽経験を豊かなものにしていく。そのために，児童が音楽の構造を考える音楽活動の授業実践とその効果を小学校の事例で述べる。

【キーワード】
音楽の構成要素，体験的な学習，音楽の構造

1．研究テーマ設定の理由

現在，子どもたちをめぐる音楽文化状況は，大きく言うと，多様化，個性化，技術化・情報化・ネットワーク化の中にある。音楽に関する情報量が飛躍的に増大したことと，音楽機器やネットワーク環境などの技術革新から，音楽経験の幅は格段に広がっている。

そもそも音楽は人間がつくったもので，その音楽がつくられる背景には，人の感情が存在する。時間と場所を越えて，音楽は作者やそれを演奏する人の感情や思いが混在した状態で，鑑賞者の耳に届けられることになる。それらの感情を理解するためには，音楽を何回も聴いたり，楽譜に書かれたことを読み取って表現したりする活動が必要になる。そこで，音楽科の授業においては，「音楽を楽しく」感じさせることにとどまらず，子どもの好みを越えて多様な音楽にふれ，「音楽がわかり，できる力」を身に付けさせるとともに，多くの人の感情を理解しようとすることをめざしたい。これは，子どもたちの音楽経験の質を高めるためにも，音楽科に課せられた使命であるとも言える。

「楽しい音楽活動」を学びの手段として，義務教育9年間を見通して，一人一人の児童生徒が音楽的概念を獲得し，音楽の基礎的な能力を高めていく必要がある。今，「音楽科としての学力は何か」問い直す局面を迎えている。

そこで，現代の音楽文化状況の中で，質の高い音楽経験へ向かうための基礎となる力を授業の中で育む，つまり「音楽科の学力」を育む研究を行う。学力デザインを中軸に据え，義務教育9年間を見通した系統的な指導を行っていく。

この学習内容の連携を行う際の指標としているのが「学力デザイン」である。「学力デザイン」は，音楽の構成要素ごとに児童生徒の音楽的概念の知覚・感受について，各発達段階をもとにレベル分けして学習内容を整理したものである。「学力デザイン」を活用した授業を構想することによって，音

＊佐賀大学文化教育学部附属小学校

楽の構成要素をもととした学習活動をスパイラルで行うようになり，児童生徒の音楽に対する感受や理解を系統立てて深められることが明らかとなった。

2．研究の構想

1　音楽的知覚・反応と学力

ベネット・リーマーは，全ての人に音楽に対する美的感受性を増すことを音楽一般教育の目標としている。この美的感受性とは，美的経験をもつ能力，すなわち，美的に知覚し，美的に反応する能力であると著書『音楽教育の哲学』において述べている。ここで言う「美的」という意味は，音楽の構造的な美しさのことである。美的感受性を増すことを本研究では音楽的知覚・反応と呼び，「音楽がどのような音，あるいはどのような音の組合せで成り立っているのかという音楽の構造を考えて，主体的に音楽を表現したり鑑賞したりすること」と規定する。

もともと人間は，学習をしていなくても音刺激に対して反応できる。授業の中で，児童が音楽を感受することに加え，音楽の構造に対して思考するようになると，音刺激に対する反応が，豊かな音楽的知覚・反応へ高まっていく。思考を伴った音楽活動の中で，身に付けるべき音楽の内容を意識しながら，児童は学習するようになる。そこで身に付いていく音楽の技術や知識が音楽科の学力である。

2　研究の概要

音楽は，音楽の構成要素や，音楽の構成要素同士の関わり合いによって組み立てられている。音楽の構造を考えるとは，音楽の味わいを生み出している音楽の構成要素や仕組み，その関わりについて分析的に考えていくことである。音楽を分析的に考えていくことが，音楽に対する感性を研ぎ澄ませ，音楽の構造的な美しさを味わうことに向かわせることになり，児童の音楽経験を豊かなものにしていく。そこで，附属小学校音楽科では「音楽的知覚・反応を高めるための手立ての工夫」と研究サブテーマを掲げ，平成24年度～平成26年度の3年間で，児童が音楽の構造を考える音楽活動のあり方を探っていくことにした。

本研究の1年次では，音楽の構造を捉えるために，児童が音楽の構成要素そのものについて理解するための学習のあり方を探った。感受した音楽の構成要素の特徴を切り口に，音楽の構成要素がどのようなものか，音や音楽で体験する「音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習の場」を設定した。音楽の構成要素を知ることで，それまで無意識に経験していた音楽の構成要素に気付き，音楽の構成要素そのもののおもしろさに気付くことができるようになった。児童が音楽の構成要素そのものを理解して，音楽について思考する活動を十分に行うことが，児童の音楽活動を主体的なものとし，音楽に対する感性を磨いていくと考える。

3　「音楽の構成要素を意識的に捉える体験的学習」について

(1) 音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習とは

音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習とは，音楽の構成要素の特徴や内容を実際に音や音楽によって裏づけしていく学習である。ある音楽の構成要素を教育内容として取り上げ，音楽の構成要素そのものの仕組みやそのものがもつ効果に気付かせていった。体験的な学習で実際に音を鳴らしたり身体表現をしたりしたことを言葉で表す活動を仕組み，音楽の構成要素の特徴や内容をつかませ，児童の思考を促していった。

(2) 音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習の流れ

音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習の流れを以下に示す（表1）。

①音や音楽の中で音楽の構成要素の特徴を感受し，音楽の構成要素に着目させる。

その題材の中で捉えさせたい音楽の構成要素が特徴的に表されている音楽を提示し，音楽を特徴付けている音楽の構成要素に注目させる。

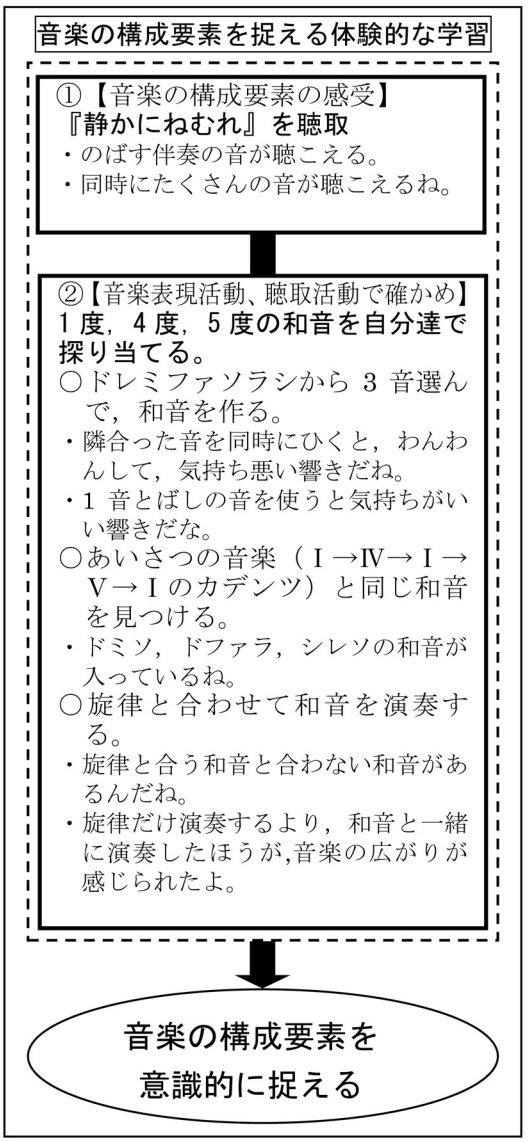
音楽の構成要素が特徴的に表されている典型的なものと変化が加わったものを比較させたり（例：ハ長調とハ短調の『かえるの合唱』の比較など）形式の分かりやすい楽曲（例：短いフレーズの反復など）を，聴取させたりする。

②音楽の構成要素の特徴について音楽表現活動や聴取活動において確かめる。

音楽の構成要素の特徴や内容に関する教材について，音楽表現活動や聴取活動を通して，気付いたことをもとに言葉で表したり，話し合いを通して，音楽の構成要素の特徴や内容について考えさせたりした。

「聴く・分析する・確かめる」という学習を繰り返しながら，児童は音楽の構成要素を捉えていった。場合によっては，児童が音楽の構成要素を理解しているか見取るために，いろいろな楽曲で応用的な音楽活動を設定した。このことによって，児童はより多様な音楽経験を積むこととなった。また，その授業において学び得たことを児童が自分なりの言葉でまとめる活動を設定した。以上の活動を通して音楽の構成要素に対する学びも確かなものとなっていった。

表1　「和音」についての理解を深める体験的な学習の例



3．授業実践

1　題材の概要　（第2学年　平成24年11月実施）

(1) 題材　「○○はつづくよ　どこまでも　～くりかえしが　いっぱい～」【テクスチュア･反復】

(2) 題材の概要

オスティナートは，楽曲の中で，ある一定の音型をたえず反復して演奏することをいう。本題材は，単純なモチーフ（動機となる旋律の一部）の反復を主旋律と合わせることで生まれる音の厚みや，重なり方の面白さに気付かせたり，反復の伴奏と旋律を重ねて合唱や合奏をしたりする活動である。

モチーフのオスティナートと旋律を合わせて歌うことで，自分のパートを歌うことだけで満足せず，お互いの声を聴いて合唱しようとすることにつながると考えた。また，1音ずつ音符を見るのではなく，音楽にはまとまりがあることに気付くことができると考えた。そこで，主旋律のモチーフを反復し，オスティナートの組み合わせを工夫して，主旋律と重ねて合唱する体験的な学習を仕組んだ。さらに，主旋律と重ねる際，反復させるモチーフによって，音楽の気分が変わることに気付かせることをねらった。

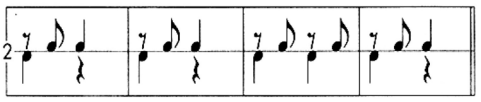
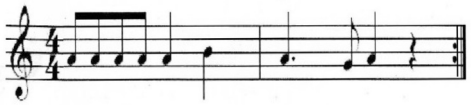
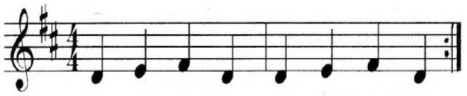
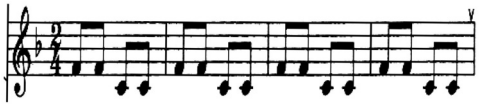
(3) 題材の目標

・　オスティナートを聴いて反復に気付き，オスティナート伴奏と主旋律を重ねることで生まれる音の厚みや重なり方の面白さを感じ取って，歌ったり合奏したりすることができる。

(4) 題材で取り扱った教材について

反復のある教材曲と旋律のモチーフを反復させることができる教材曲（**表2**）を提示した。

表2　教材曲とリズムの特徴について

教材名	内　　容	
教材曲A 山のポルカ	伴奏のパートは4小節ごとに同じリズムを反復させているので反復の学習の導入に適した楽曲である。	
教材曲B かごめかごめ	児童にとって身近な楽曲であり，モチーフや主旋律を重ねた際，歌いやすくオスティナート合唱の導入に適した楽曲である。	
教材曲C かねがなる	同じ1小節のコード進行でつくられ，2小節ずつ同じモチーフを反復している。どのモチーフを反復させてもオスティナートになる。	
教材曲D 汽車は走る	打楽器や鍵盤楽器のオスティナートの伴奏があり，反復の伴奏は汽車が走るときの車輪や警笛の音の様子を表現している。	

(5) 題材の構成について

視点で，オスティナートの特徴や面白さに気付く活動を行うために，第1時では，反復や主旋律と伴奏の役割について関心をもたせた。まず，反復に気付くことができるように，リズム伴奏に反復のある楽曲，次に主旋律に反復はないが旋律のモチーフを反復させるとオスティナート伴奏になる楽曲を扱った。オスティナートの特徴に気付いた上で，第2時ではオスティナートの組み合わせを工夫した歌唱活動を行った。第二次では，オスティナートの組み合わせでなく，オスティナートの速さや強弱を工夫して合唱奏する活動を仕組んだ。題材の流れを表3に示す。

表3　題材の流れ（□は「音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習の場」）

次	時	主な学習活動	教師の働きかけ
1	1	**くりかえしのばんそうとせんりつを合わせて歌おう**	
		・歌と打楽器で教材曲Aを合唱奏する。 ・教材曲Bをオスティナート伴奏と一緒に歌う。	**◆音楽の構成要素【テクスチュア・反復】** オスティナート伴奏と主旋律を重ねた歌唱表現 ・打楽器のパートが反復の伴奏になっていることに気付かせるために，拡大楽譜を提示した。 ・オスティナート伴奏のみを歌った時と，主旋律を重ねて歌った時の音の重なり違いを比較できるように，グループごとにお互いに聴き合う場を設定した。

	2（本時）	くりかえしのばんそうをつくろう。	
		・教材曲Cのオスティナートの組み合わせを工夫して，歌う。 ・①～④のオスティナート伴奏のパターンごとに発表し，聴き合って感じ取ったことを話し合う。	◆音楽の構成要素【テクスチュア・反復】 オスティナートの組み合わせを工夫した歌唱表現 ・モチーフカードを並べさせて，オスティナート伴奏をつくらせた。 ・異なるオスティナート伴奏の演奏を比較させ，主旋律とオスティナート伴奏がユニゾンになる部分があることやオスティナート伴奏のパターンによって音楽の気分が変わることなど教材曲Cの感じの違いを考えさせた。
2	3	くりかえしの音を見つけよう	
		・楽譜を見て，オスティナート伴奏のパートを見つける。 ・教材曲Dを合奏する。	◆音楽の構成要素【反復】オスティナートの歌唱表現 ・楽譜を配付し，楽譜を見て気付いたことを問いかけ，伴奏がオスティナートになっていることに気付かせた。 ・伴奏パートを楽器で演奏させ，リズムや和音の反復が，汽車のどんな音を表しているのか考えさせた。
	4 5	くりかえしのばんそうをくふうして　いろいろな汽車を走らせよう	
		・教材曲Dの伴奏を演奏する。 ・教材曲Dの合奏をする。	◆音楽の構成要素【反復】オスティナートの歌唱表現の工夫 ・オスティナート伴奏の速さや強弱を変えて演奏させ，駅が近付いたとき，山道を走るときなど汽車が走る様子を，オスティナート伴奏を変化させることで表せることに気付かせた。 ・どのように汽車を走らせたいかイメージに合う速さや強弱を考えさせた。

2．授業の実際

(1) 伴奏と旋律を合わせて合奏唱したり，合唱したりする活動での児童の様子

まず，山のポルカの旋律のみ歌ったり伴奏のみ演奏したりすることで，楽曲の中には旋律と伴奏があり，それぞれに役割があることに気付かせた。また，楽譜を配付すると同じリズムに印を付け始めたことから，山のポルカの伴奏が繰り返しになっていることに気付いていたことが見て取れた（**図1**）。その後，印を付けた楽譜を見ながらリズム打ちをして，反復していることを確認する様子が伺えた。

図1　楽譜の中から反復を見つけ発表する児童の様子

次に，「かごめかごめ」の終わり2小節のモチーフを反復させたものをオスティナート伴奏とし，歌唱活動を行った。「かごめかごめ」をオスティナート伴奏のみ，旋律のみ，とパートごとに歌うと「伴奏だけで歌うと物足りない」「つまらない」という意見がでた。そこで，オスティナート伴奏と旋律を合わせて歌うことにした。「伴奏だけだとつまらないのに，旋律と合わせると不思議な感じがする」「重なると楽しい」と旋律と伴奏を重ねて歌って感じたことを述べていた。

(2) 音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習の実際と考察（2/5時）

旋律と伴奏を重ねて合唱したときと，旋律のみ，伴奏のみで歌ったときの曲の感じの違いについて感受した上で，旋律の一部のオスティナート伴奏と旋律を重ねて歌い，重なり方について確かめる活動を仕組んだ。オスティナート伴奏と旋律の組み合わせ方について，児童がどのように思考し

ていったか学習の様相を追った。

①　オスティナート伴奏をグループで考える様子

児童が「かねがなる」の旋律の中からモチーフを選び，そのモチーフを反復させて，オスティナート伴奏をつくった。自分達で考えたオスティナート伴奏を楽譜で表すことができるように，グループごとに拡大楽譜と4種類のモチーフカード（**図3**）を配付した。並べたモチーフカードがオスティナート伴奏になっていることを可視化するために，モチーフごとに色分けをした。また，どの部分で旋律とオスティナート伴奏がユニゾンになるのか分かるように，「かねがなる」の旋律の楽譜にもモチーフカードと同じように色分けした。

図2　モチーフカードを並べてオスティナート伴奏をつくる児童の様子

②　オスティナート伴奏と旋律の組み合わせ方について，話し合う様子

グループでの活動後，全体で話し合う場を設けた。話し合っている様子を以下に示す（**表4**）。

表4　重なり方について話し合う様子

T　なぜ D（**図3**）に決めたのか理由を教えてくれますか（**図4**）。

C1　「かごめかごめ」では「うしろのしょうめんだれ」をずっと歌っていて，最後も「うしろのしょうめんだれ」になるから①です。

T　そこを合わせたいということですか。

C1　はい。

C2　私たちも最後を合わせたいから D ②にしました。

T　他にありますか。

C3　C です。「かごめかごめ」は上（旋律）と下（最後のモチーフ）で合わせたんですけど，（「かごめかごめ」では）真ん中はまだ出てなかったから③を選びました。

C4　最初のところでやったら，もう，終わった感じという気がするから④，真ん中でしました。

C　C4さんのグループはみんなで合わせるところを聴かせたい。だから，聴かせたいところを最初に合わせたらもったいないのでとっておくそうです。

T　では，A はどうでしたか。

C5　これもよかった。

C6　最初が一緒になる。

C7　最初だとつまんない⑤。

C8　最後の4段目のとき，A だと，まだ続くのかなっと思った⑥。

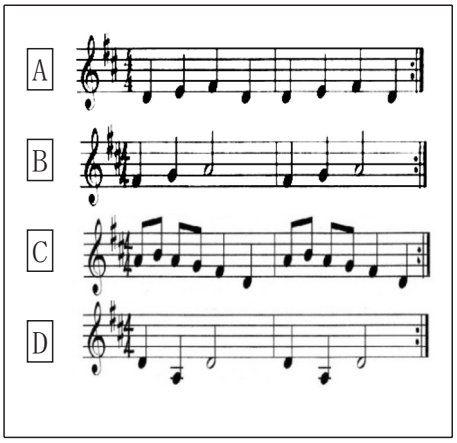


図3　オスティナートの伴奏パターン

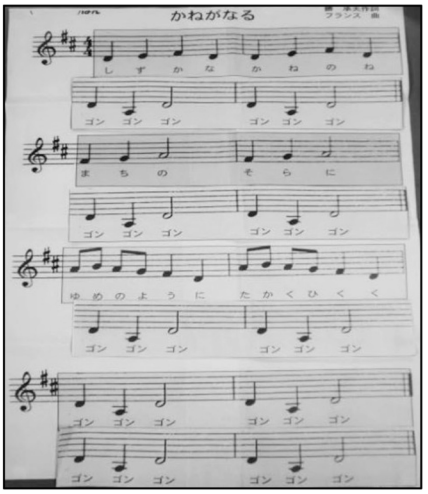


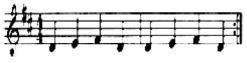
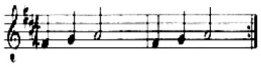
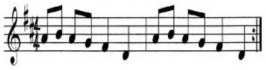
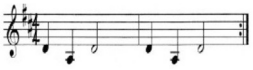
図4　児童がつくった オスティナート伴奏の楽譜

前時に「かごめかごめ」で「うしろのしょうめんだれ」のモチーフをオスティナート伴奏にして合唱をしたことを想起し，①のように教材曲Ｃの最後のモチーフをオスティナート伴奏にしたいと考える児童が多くいた。②のように，違う旋律が聴こえていて，最後に歌声がぴったり合うと気持ちがいいことを感じていた。教材曲Ｃの終わりの感じやまとまりを感じ取っていることが分かる。

また，③のように，いろいろな組み合わせ方を試すことで，旋律の最後のモチーフ以外でもオスティナート伴奏になることに気付いたことが分かる。いろいろな組み合わせを試した結果，途中でユニゾンになることに面白さを感じていた。④⑤のように，歌声がぴったり合うというユニゾンの面白さを楽曲の前半にもってくるより，最後にもってきた方が盛り上がると考えていたことが見て取れる。⑥は，続く感じで曲が終わると違和感があることに気付いていた。曲の終わり方や曲のまとまりを考えた発言であることが分かる。

表5に選んだモチーフとその理由について示す。

表5　選んだモチーフとその理由

モチーフ	A 	B 	C 	D 
人数	2	1	21	17
理由	・ゆったりとしたかんじだから。 ・本当にかねが鳴っているみたい。	・（歌しの内ようが）空までひびく，だから。	・タタのリズムがはやくて楽しい気もち①になる。 ・高い音だから楽しく②なる。 ・まん中を合わせたい③から。	・歌いやすい④から。 ・さいごを合わせると，ちゃんとおわるかんじ⑤がする。 ・一番さいごに合ったらふしぎだから。

多くの児童は，C と D のモチーフを選んでいた。（①②）のように，細かいリズムや高い音が重なることで，にぎやかさや楽しさを感じていたことが分かる。（③⑤）では，盛り上げたい部分や，曲の終わりなど曲の構成を考えて選択していることが分かる。

（④）のように歌いやすさを述べている児童がいた。4つのパターンを試して，反復したときのモチーフのつながり方や旋律との重なり方などを感覚的に感じ取っていることが伺える。

図6は，モチーフを選択した理由を分類したものである。

C を選んだ児童は，表5の記述にもあるように，にぎやかさ楽しさを好んでいたことが見取れる。D を選んだ理由の多くは，曲の構成を考えたものだった。児童の記述からも，最後に終わった感じで終わることに心地よさを感じていたことが伺える。歌ってみたときの雰囲気だけでなく，曲の流れやまとまりを考えた上で，どのオスティナート伴奏の組み合わせ

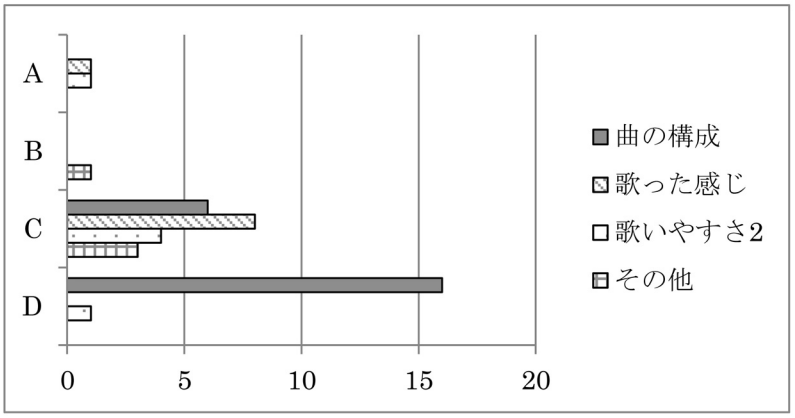


図6　モチーフを選択した理由

がいいか思考していたことが伺える。

2時目の振り返りからも，いろいろなパターンを試しながら自分たちのオスティナート伴奏の組み合わせを考えていたことが分かる（**図7**）。また，自分たちで組み合わせを考えることができたことにも達成感を感じていることからも「音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習の場」を仕組むことが有効だったと言える。

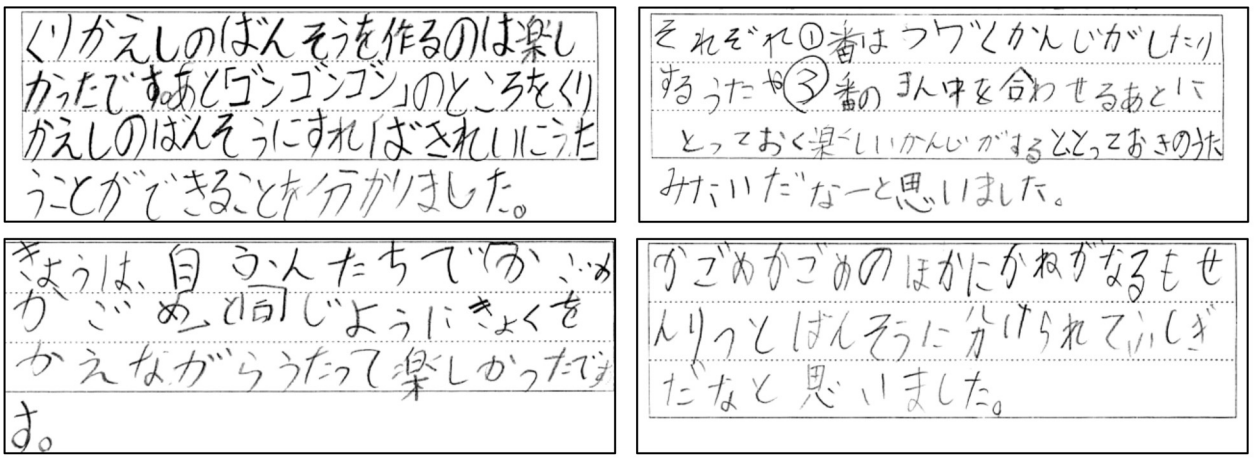


図7　2時目の振り返りの記述

(3) 題材終了後の児童の振り返り

- せんりつも，ばんそうもとってもおもしろいです。もっとしたかったので，いつかまた，やってみたいです。
- 「かねがなる」でくりかえしでせんりつとばんそうを合わせてふしぎな音になったのが分かりました。
- くりかえしは，せんりつと合わせるときれいでした。
- 歌にはいっぱいくりかえしがかくれていました。
- 「〇〇がいっぱいどこまでも」のべんきょうで分かったのは，くりかえしはお話だけじゃないということと，いろいろな歌もいっしょに知ることができました。
- 工夫をすればするほどおもしろいなと思いました。

図8　題材終了後の児童の振り返りの記述

児童の記述より，オスティナートの反復する面白さや旋律と組み合わせたときの美しさなど，特徴をつかむことができたことが見取れる。また，これまではあまり意識していなかった旋律と伴奏という楽曲の中に役割があることにも気付くことができたことが分かる。オスティナートという言葉の意味の理解ではなく，音楽を伴ってオスティナートの特徴をつかんでいたことからも「音楽の構成要素を意識的に捉える体験的な学習の場」が有効だったと考える。

3．研究の成果

グループでオスティナート伴奏と旋律の組み合わせ方を実際に歌って試し，感じたことを伝え合うことで，オスティナートに対する思考が促され，オスティナートの特徴に気付くことができた。

オスティナート伴奏と旋律の組み合わせ方を考える中で，オスティナート以外の音楽の構成要素についても児童は着目して活動をしていた。音楽は複数の音楽の構成要素のかかわりによって，一つの

音楽の構成要素とは違う音楽のおもしろさを生み出す。これから，複数の音楽の構成要素のかかわりについても探っていくような活動を仕組んでいきたい。

【参考文献】

・マルコム・テイト　ポール・ハック『音楽教育の原理と方法』，音楽之友社，1991年
・ベネット・リーマー『音楽教育の哲学』，音楽之友社，昭和62年